十一月宝生会　月並能

十一月八日（日）
午後二時始

14:00

三笑

シテ　武田　孝史
子方　藪　俊太朗
陶　山内　崇生
陸　和久荘太郎

後見　宝生　和英
小倉伸二郎
東川　尚史

間　野村　裕基

大鼓　亀井　実
小鼓　飯冨　孔明
太鼓　桜井均
笛　藤田朝太郎

地謡　野月　聡
朝倉　俊樹
高橋　章
金森　秀祥
小倉健太郎

14:50

舟渡聟

野村　萬斎

野村太一郎
高野　和憲

〈休憩十五分〉

15:35

芭蕉

シテ　前田　尚廣

ワキ　殿田　謙吉
間　石田　幸雄

大鼓　佃　良勝
小鼓　曽和　正博
笛　松田　弘之

後見　小林与志郎
藤井　雅之

地謡　大友　今井　泰行　順
水上　東川　亀井　保雄
光　優夫

終演予定　十七時四十五分頃

演目の解説

能「三笑」（さんしょう）

晋の慧遠禅師は廬山の麓に白蓮社という庵を結び、世俗を捨て隠棲し、虎渓を出ることを自らに禁じていました。そこへ陶淵明と陸修静の二人が小童を伴って訪れ、言葉を交わし、盧山の瀑布を愛で、盃を交わして酒宴となります。小童が舞を舞い、興の赴くまま慧遠禅師も舞を舞います。帰って行く二人を送り方々、つい うっかり虎渓を出てまった事を陶淵明に指摘され三人で笑って終ります。有名な「虎渓三笑図」の画題そのものを能にした稀曲。

狂言「舟渡聟」（ふなわたしむこ）

京都から琵琶湖畔の矢橋（やばせ）へ、妻の実家に初めて挨拶に向かう聟が、大津松本から渡し舟に乗る。聟の持つ手土産の酒樽に目を付けた酒好きの船頭は、是非一献と所望する。聟が断るとやむを得ず舟を激しく揺らすぞと脅す。聟の方は、仕方なく飲ませ、軽くなるので、強要するとたった酒樽を持って舟宅へ出向く。やがて外出していた舅が帰宅すると、物陰から聟の顔を見てびっくり仰天。舅こそが先程舟で酒を無理やり振舞わせた船頭だったのだ。舅は姑の勧めで髭を剃り、顔を隠して対面する…

能「芭蕉」（ばしょう）

楚の湘水の山中にすむ僧は、自分以外は住む人もない寂しい山中の庵で、毎夜読経していたが、いつしか庭に人の気配を感じるようになりました。庵を訪れてい たのは一人の女人で、僧のそばで有難い経の功徳に預りたいという望みを持っていました。僧は本来女人禁制ではあるが、女の気持ちを汲んで庵室に入るのを許します。僧と言葉を交わした女は、実は芭蕉の精であると明かし、姿を改めて現れると、諸法実相の理を説き、世の無常を嘆き、舞を舞いますが、やがて激しく吹く風に、花も草も女の姿も消えてしまいます。

チケット料金

S席	8,000円
A席	7,000円
B席	6,000円
C席	5,000円
D(自由)席	3,000円

ご購入は
オンラインチケット
または
宝生会事務局まで